

札幌市子ども・子育て会議  
若者支援施設在り方検討部会

会 議 録

日 時：2024年12月19日（木）午前9時30分開会  
場 所：大通バスセンタービル2号館2階 子ども未来局大会議室

## 1. 開 会

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 時間になりましたので、ただいまから、第3回札幌市子ども・子育て会議若者支援施設在り方検討部会を開催いたします。

皆様、年末のお忙しいところをお集まりいただきまして、ありがとうございます。

札幌市子ども未来局子どものくらし・若者支援担当課長の引地でございます。本日もどうぞよろしく願いいたします。

会議の開催に先立ちまして、確認とご報告がございます。

まず、会議の公開についてですが、当部会は公開で開催することとなっており、本日は、報道の方に加えまして、一般の方も傍聴にお越しいただいております。

また、議事の概要は、後日、札幌市のホームページに公開いたしますので、ご承知おきいただきたいと思っております。

ただいまの出欠状況は、お一人がまだご到着になっておりませんが、6名中5名の委員の方にご出席いただいておりますので、会議が成立していることをご報告申し上げます。

それでは、ただいまより議事に入ります。

議事進行は、永浦部会長をお願いいたします。

## 2. 議 事

○永浦部会長 では、議事を進めてまいりたいと思っております。

本日の議事は、お手元の次第に記載のとおり、3点ございます。

最初に、これまで実施した調査結果について事務局からご報告いただき、その後に、今後の部会の進め方について議論を行いたいと思っております。

それでは、若者支援施設基礎調査の調査結果報告について、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） それではまず、調査の概要からご説明させていただきます。

A 4判横の資料1をお手元にご用意ください。

今回の調査では、資料の左から、現在施設を利用されている方の利用実態などを調査した施設利用者アンケート、次に、現に若者の支援を行っている方や当事者の方にお話を伺った支援者・当事者ヒアリング、さらに、本市の検討の参考とするために実施した他都市事例調査、最後に、若者支援施設の利用者にアンケート形式で行った若者意識調査、以上、四つの調査を実施いたしました。

本日は、時間の都合上、左の三つについて概略をご報告いたしますので、若者意識調査につきましては、必要に応じてご参照いただきたいと思います。

それでは、まず最初に、資料2、施設利用者アンケートについて、事務局の渡邊職員からご説明させていただきます。

○事務局（渡邊職員） それでは、資料2の施設利用者アンケートの調査結果についてご報告いたします。

まず、4ページをご覧ください。

今回の利用者アンケートの概要についてご説明をいたします。

実施時期は、7月1日から8月31日までの2か月間、調査対象は、年齢や利用形態を問わず、市内5か所の若者支援施設を利用した方を対象といたしました。実施方法は、無記名によるアンケート調査、その結果、回答数でございますが、1,075件となっております。

次のページをご覧ください。

調査項目につきましては、主に5項目となります。上から、年齢、居住形態等の基本情報、貸室、ロビー、相談支援・イベント等、最後に、施設に求める機能となっております。

アンケートは全33問で実施をしましたが、本日は時間の都合もございますので、主要なものに絞ってご説明をさせていただきます。

それでは、7ページをご覧ください。

まず、回答者の属性についてご報告をいたします。

左上の円グラフ、年齢ですが、「20歳～34歳」からの回答が最も多く、「0歳～19歳」と合わせますと、青線で囲っていますように、69.8%を占めました。

右上のグラフ、居住形態は、「親／兄弟等と同居」が44.0%で最も多く、左下の円グラフ、職業は、「学生」が37.5%で最も多い結果となりました。

次のページへお進みください。

若者支援施設への来館手段についてでございます。

棒グラフの下二つ、35歳から49歳と50歳以上は茶色で示している「自家用車」の割合が最も高い結果となりました一方、0歳から19歳、そして、20歳から34歳は赤色の「公共交通機関」の割合が最も高い結果となりました。また、緑色で示しています「自転車」あるいは水色の「徒歩」の割合を合計しますと、全体では、青色で示しておりますように25.3%でありましたが、0歳から19歳に限りますと、38.6%を占める結果となっております。

次のページをご覧ください。

ここから、貸室に関する調査結果のご報告となります。

最近1年間でお金を払って貸室を利用したことが「ある」という方は64.1%、「ない」という方は33.4%でございました。

あると答えた方に貸室の利用目的を尋ねましたところ、「ダンス」という回答が最も多く、その後、「スポーツ」「音楽」「その他趣味の活動」「演劇」「ボランティア活動／会議／打合せ」と続く結果となりました。

一つページを飛ばさせていただきます、11ページをご覧ください。

若者支援施設以外に同じ目的で利用している貸室の施設の有無を尋ねましたところ、ほ

かに使っている施設が「ある」と回答した方が46.3%、「ない」という方が51.5%となりました。

類似施設があると答えた方から回答がありました具体的な施設でございますが、「区民センター／地区センター」や「各区体育館」といった公共施設を挙げる声が多かったほか、民間の「貸し音楽スタジオ」も一定の利用があることが分かりました。

以上が貸室に関する調査結果となります。

次のページへお進みください。

次に、ロビーに関する調査結果についてご報告をいたします。

最近1年間にロビーを利用したことがあるという方は、0歳から19歳あるいは20歳から34歳では過半数を超える一方、35歳から49歳では24.5%、50歳以上では32.6%にとどまる結果となりました。

次のページをご覧ください。

ロビーの利用目的についてです。

赤色の棒グラフで示しています0歳から19歳は、一番左の「自習」や、その隣の「友人との勉強会」を目的とする利用が多く、緑色で示しています20歳から34歳は、「自習」のほか、真ん中やや左になりますが、「趣味／創作活動」や、少し右に進みまして、「友人とのお喋り」「スタッフとのお喋り」「軽食」「時間調整」「休憩」など、幅広く利用されている傾向がございました。

一方で、水色の35歳から49歳あるいは茶色の50歳以上の方々につきましては、目的にかかわらず、あまりロビーが利用されていないという状況でございました。

次に、また一つページを飛ばさせていただきまして、15ページへお進みください。

ロビーにおけるスタッフとの関わりについて、グラフをご覧いただきたいと思いますが、上から「雑談をしたことがある」「ゲームなどを一緒にしたことがある」「軽い相談をしたことがある」「プライベートにかかわる相談をしたことがある」という何らかの関わりを持ったことがあると回答した方は、どの選択肢においても20歳から34歳が最も多く、次いで、0歳から19歳が多い結果となりました。

「その他」と回答された方の中には、「軽食をもらった」や「イベントの打合せをした」、「第2の親みたいなもの」という回答もございました。

次のページをご覧ください。

若者支援施設以外に同じ目的で利用しているロビー施設の有無は、「ある」と答えた方が14.6%、「ない」という方が82.6%でございました。

その具体的な利用施設ですが、図書館、エルプラザ、区民センター、ちえりあなどの公共施設や、学校やカフェ、あるいは、NPO法人が運営している居場所、発達障がい者支援施設などがございました。

以上がロビーに関する調査結果となります。

次のページをご覧ください。

ここから、相談支援・イベント等に関する調査結果についてご報告をいたします。

若者支援施設で実施している相談・支援プログラムや交流イベント、ボランティア活動を利用、参加したことが「ある」という方は、全体で14.0%でございました。

年齢別に見ますと、20歳から34歳が19.3%と、他の年齢と比較してやや高い傾向がございました。

次のページをご覧ください。

相談支援・イベント等の具体的な利用内容について、グラフの一番上、「個別面談」とその下、「対人関係や就労／就学のための支援プログラム」は、緑色の20歳から34歳の利用が突出して多い結果となりました。

グラフの3番目、「交流イベント／ボランティア活動」につきましても、20歳から34歳の利用が最も多い一方、赤色の0歳から19歳の利用も一定程度見られる結果となりました。

一つページを飛ばしまして、20ページにお進みください。

若者支援施設以外に相談支援・イベント等同じ目的で利用している施設につきましては、「ある」と答えた方が13.2%、「ない」と答えた方が83.4%でございました。

その具体的な類似施設ですが、エルブラザやNPO法人が運営する居場所、フリースクール、ハローワーク、デイサービス、カウンセリング、コミュニティカフェ等の回答がございました。

以上が相談支援・イベント等に関する調査結果となります。

次のページをご覧ください。

最後に、若者支援施設に求める機能についてご報告をいたします。

こちらは、全世代で、「自習／趣味／お喋りなど、誰でも気軽に立ち寄れる居場所の提供」という回答が最も多く挙がりました。次に多かった回答が「活動室や体育館など、活動する場所の提供」、その次が「不登校やひきこもりの方たちの相談支援」となりました。年齢別で施設に求める機能に大きな違いが見られることはありませんでした。

以上で、施設利用者のアンケート調査の結果報告を終了させていただきます。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） ご質問につきましては、進行の都合上、この後、全ての報告が終わった後に、まとめてお受けしたいと思います。

続きまして、資料の3番目、支援者・当事者ヒアリングの結果につきまして、私からご報告させていただきます。

お手元に緑色の資料3をご用意ください。

5ページからお開きいただきたいと思います。

ヒアリング先の一覧です。

支援に携わる機関として18の機関から、また、右側の表のとおり、若者当事者、施設の利用団体、職員からお話を伺うことができました。

続きまして、7ページをお開きください。

最初は教育分野のヒアリング結果です。

四角の二つ目、若者支援施設との連携の現状ですが、多くの中学校や教育支援センターでは、進路未決定のまま卒業を迎える生徒や、高校への通学の継続に不安のある生徒に対して、若者支援施設を紹介していただいていたいました。

四角の三つ目、若者支援施設に対する意見や期待です。

一度学校を離れてしまったら、就学や就職などの困難が起こっても、もう学校では関わるできないので、若者支援施設に支援を引き継いでもらいたいという声が聞かれました。潜在的な支援ニーズは多いというのが現場のお声でございました。

また、パンフレットを配るだけでは、なかなか実際の行動に踏み出せないのが、例えば、教育支援センターに在籍しているうちに、保護者の方も来ているような機会に職員が向かっていって、実際に顔を見せたりするのがよいのではないかという意見も頂戴したところでございます。

一番下まで飛びますが、中高校生年代が施設を利用する場合、自転車で行ける範囲や交通の便のよい立地でなければ継続的な利用は難しいのではないかという意見もございました。

それでは、続きまして、8ページをご覧ください。

児童福祉分野でございます。

若者支援施設との連携の実績ですが、限定的な取組にとどまっているのが実情でございます。

若者支援施設に対する意見ですが、おおむね中学校卒業前後から高校生年代までが児童福祉と若者支援が重なる領域になりますけれども、残念ですが、児童福祉に携わる職員は、若者支援の取組を知識としては知っていても、自身の身近な実例としてはよく知らないことも多いという声が聞かれました。

一方で、例えば、中央区と若者支援総合センター、あるいは、北区とアカシア若者活動センターなどでは、居場所の提供などの連携事例が比較的多い状況がございまして、物理的な距離が心理的な距離にも影響していると思うという声も聞かれたところでございます。

近年、妊産婦、乳幼児への支援と、児童期、学齢期への支援の接続、連携の強化が進んでおりますが、今後は、学齢期から若者期への支援の接続の強化も考えていかなければならないのではないかという問題意識を、児童福祉部門からも確認できたところでございます。

9ページにお進みください。

障がい分野・精神保健分野です。

この分野で聞かれましたのが、障がいを受容できれば支援に乗せていけるのだけれども、障がいを受け入れることができなければ、障がいサイドとしてできる支援がないこと、若者支援施設には若者支援施設の間口の広さを生かして、そうした若者が社会から孤立してしまわないように、これからも受け入れてほしいという声が聞かれました。

現在の若者支援施設は、特定の困りだったり、困りの有る・無しによって対象者を限定しておりませんので、そうした今の運営方法を評価する声が、他の分野も含め、多く聞かれたところでございます。

続きまして、10ページにお進みください。

生活困窮分野・雇用分野でございます。

区役所の保護課では、経済的な自立の支援に重きが置かれておりますが、その前段階として例えば、対人訓練や居場所として若者支援施設が活用できるということは、一部のケースワーカーにしか認知されておりました。就労につながるなら利用を進めやすいという発言もあった一方で、現に生活に困っている方が、交通費をかけて継続的に都心まで通うのは難しいという意見もございました。

ただ、就労支援を専門に行っている相談員には、若者支援総合センターが国から受託している地域若者サポートステーションのことが広く知られておりまして、働いた経験がほとんどない若者には、支援に長けた若者支援総合センターを紹介していると、評価する声が多く聞かれたところでございます。

ハローワークからもお話を伺ったのですけれども、仕事が長続きしない若者に共通する傾向として、コミュニケーションが苦手であることが挙げられるということです。これからも、コミュニケーション力の向上を含めた支援を、さらに発展させていってほしいと期待するお声をいただいたところです。

最後に、一番下になりますけれども、札幌市では、生活に困窮する家庭の中学生を対象とした学習支援事業を市内40か所で実施しておりまして、中学校を卒業したら事業の対象外となるのですけれども、その40か所の会場で、卒業しても毎年1人か2人、高校生になってもずっと通いたいというお子さんがいるそうです。高校生年代になっても居場所のニーズは確実にあって、若者支援施設にその受皿になってもらいたいという意見がございました。

それでは、11ページに進みます。

ここでは、若者グループの座談会でお声を聞いておりますので、そのお声をご報告します。

大きく二つテーマを設けてお話を伺いましたが、まず一つ目、世の中に相談窓口というところがあるの知らない高校生に、どういう場所だったり、状況だったら、困っていることを相談する気になりますかということテーマに、お話を伺いました。

真っ先に聞かれたのがネットやSNSがいいというご意見でございました。深掘りしていきますと、匿名でも交流できること、その中で少しずつ自己開示をしていけること、それから、自分のタイミングで返事ができること、あるいは、ワンクッション置いて考える時間があるのがよいということでした。

それでは、もしリアル、対面の場合はどういうところだったら行く気になりますかと聞いてみたところ、行ったら絶対相談するしかない、そういうところには、よっぽど相談し

たいことが決まっていな限り、行きづらくて、例えば、行ってみて気持ちが乗らなかつたら、無理に話さなくても気まずくならない、場が成立するようなところだったら行きやすい、そういったお声が聞かれたところです。

二つ目の座談会のテーマとして、若者支援施設への期待を聞きました。

全く使ったことがないグループ、ライトユーザー、ヘビーユーザーと、大きく三つのグループに聞きました。

まず、利用したことのない方として、先ほどご紹介した学習支援の中学生に聞いたところ、中学校卒業後も年上の人と話せる場所がほしいということをお話してくれました。同級生だと話しづらいことがあるということをお資料にも書きましたが、同級生だと、気になる異性とか、あまり自分の弱い部分を見せたくないような同級生がいて、そういう人はそういう人でももちろん必要だけれども、それとは別に、安心して素の自分を出せる場所が必要なのだろうなというようなことを話の中で感じたところです。

続いて、ライトユーザーの高校生にも話を聞きましたら、この方々は、若者支援施設は、体育館や音楽室があつて、友達と一緒に遊びに行くところと思つてお話をしてくれまして、あまり相談に行く場所というイメージは持っていないようでした。ただ、そこに行つて、自分の気持ちを共感してくれる人がいたらいいな、そんなようなことを話してくれたところです。

最後に、ヘビーユーザーである20代から30代の若者からは、今のこの施設の、みんなが思い思いに好きなことをしている空間が気に入つておるという声が聞かれました。この後の資料にも出てまいりますが、自分からは話しかけられないんだよね、だけど、あそこに行つたら声をかけてもらえるから、声をかけてもらうのを待つておるという話をしていたところでございます。

それでは、12ページに進みます。

こちらは、若者支援施設で交流やイベントを行つておる団体の声です。

ここでも、利用者は声をかけられるのを期待しておるようですよという意見が聞かれました。こちらの団体は、施設の育成プログラムの対象として活動を始めて、3年間プログラムを受けた後、4年目にひとり立ちをしております。少しずつ活動を発展させてきたことが長く続けてこられた要因であり、これからもこのようなサポートを続けてほしいとお話しておりました。

ハード面については、ロビーが一番重要になることや、レイアウトにも工夫が必要になるという意見、それから、若者は同年代の仲間づくりや同じ属性の者同士が集まる場所に心理的な安定を求めているので、例えば、中高年の方も多数利用することになった場合、若者はもう自分の居場所がなくなつたと感じて、去つてしまうのではないかとお懸念しておりました。

貸室に関しては、様々な意見があると思つたと前置きをした上で、貸室は探せば他にもあるけれども、若者支援施設のロビーのような場は他にはないこと、貸室は平均7、8人か



ら10人ぐらいの利用が多いようですけれども、多少割高になったとしても、利用される方がみんなで割り勘をすれば、負担できないということはないのではないかとというのが、その方のご意見でございました。

続きまして、13ページにお進みください。

最後に、若者支援施設のスタッフにも意見を聞きました。

教育分野との連携に関しては、なお連携強化の伸び代はあると思うということです。

自立支援事業を総合センター1か所で実施していることについては、拠点を増やすことも考えられるものの、現時点で総合センター以外での量的なニーズは不明であり、利用者の利便性の向上と効果的・効率的な機能の提供の両立には、工夫が必要ではないかという意見でした。

区の保健福祉部との連携に関しては、現在の若者活動センターの実施事業の中でも、やり方によってはもっと一緒にできることがあると思うというのが意見でございまして、資料に記載させていただいたのはその一例になります。

続きまして、14ページをご覧ください。

ロビーが重要になるということは一致した意見でした。ある程度の面積を取って、目的に沿ったゾーニングができると、より充実した場合になるだろうということです。また、生活の不安定な若者の利用も想定するなら、軽いものでよいので、食支援機能があってもいいのではないかという意見も出されました。

貸室については、必ずしも若者支援施設が単独で所有する必要はないものの、若者がこれからも低廉な価格で利用できる場が一定程度あったほうがよいこと、また、若者のグループ活動や社会参加を支援する機能についても、公的な施設として維持していくことが望ましいのではないかとこの意見でした。

支援者・当事者ヒアリングのご報告は以上ですが、ここまでの利用者アンケートと、支援者・当事者ヒアリングの中で把握された現状と課題を、資料4にまとめておりますので、続けてご覧いただきたいと思います。

まず、利用者アンケートでは、大きく、貸室利用、ロビー利用、相談支援、イベント利用の三つの利用形態ごとに状況把握を行いました。着目すべき点として、貸室利用者は、46.3%が区民センターや区の体育館など、他の施設も利用していたのに対して、ロビー利用、相談支援・イベント利用にあっては、他の施設も利用している方は14%台にとどまっていました。

それから、一番下のこれからの若者支援施設に求める機能は、最も多かったのが誰でも気軽に立ち寄れる居場所の提供、次が活動室や体育館など活動する場の提供、3番目が不登校やひきこもりの方たちへの相談支援でした。

なお、ボリュームゾーンでございます20代から30代では、第2位と第3位がほぼ同数でした。

続きまして、裏面をご覧ください。

ここでは、支援者ヒアリングで把握された課題のうち、主なものを、ニーズの上での課題と、シーズ、供給面での課題に分類した上で、五つほど抜粋しています。

まず、ニーズの上での課題ですが、学校を離れた後に公的支援が途切れてしまう子ども・若者が少なくなく、支援のバトンを受け継いでもらいたいという声が多数確認されました。

次に、現在、若者支援総合センター1か所で実施をしております自立支援事業について、経済的に余裕のない若者には勧められないという意見が聞かれました。

一方で、自立支援事業は、単に相談ブースがあればよいわけではなくて、相談、プログラム等の訓練、居場所の三つの機能が1パッケージで提供できることで効果が高まりますけれども、五つの施設全てで実施するほどのニーズがあるかが分からないという指摘もございました。

さらに、安心して過ごすことのできる居場所については、利用者からも支援者からも重要視する意見が多数聞かれました。

続きまして、シーズ、供給面での課題です。

特に、高校生年代や生活に困窮する若者は、区役所の保健福祉部門と支援が重なる部分がありますが、現状では、区役所側に若者支援施設が十分認知されておらず、有機的な連携だったり、相乗的な効果の発揮に課題があると考えられます。

最後に、この部会の設置趣旨でもありますが、札幌市の財政状況から、将来にわたって、現在の機能の全てを維持することは難しいという課題がございます。その中で、現在提供している貸室、居場所、自立支援、若者の交流や社会参加の促進、これらの機能のいずれを拡充し、いずれを維持し、いずれを縮小あるいは異なる方法で提供していくことが適当なのか、考え方の整理が必要でございます。

以上、札幌市の調査結果と、その中で把握された現状と課題を見てまいりましたが、ここからは、今後の方向性を考えていく一つの材料として、他都市の事例も調査しておりますので、こちらについては中島係長から報告させていただきます。

○事務局（中島育成・支援担当係長） 資料5の他都市事例調査の調査結果について説明させていただきます。

第2回の在り方検討部会では、若者支援総合センターと宮の沢と豊平の若者活動センターの現地視察を行っていただいておりますが、札幌市と他都市の違いなどを想像していただきながら聞いていただければと思います。

次のページです。

他都市事例調査では、積極的に若者支援を行っている関西地区の施設を中心に現地視察を行っております。

資料では、若者の交流促進・福祉的支援を実施する施設、若者の交流促進を主とする施設で区分しております。

合計9施設の事例報告となっておりますが、説明時間が限られておりますので、幾つかピックアップして説明させていただきます。

次のページをお進みください。

若者交流促進、福祉的支援を実施する施設は合計7施設となります。説明につきましては、この中から吹田市、茨木市、次ページの表に記載する京都市伏見、神戸市青少年会館とさせていただきます。

では、11ページまで進んでください。

吹田市子ども・若者総合相談センターぷらっとる一む吹田の調査報告となります。

ぷらっとる一む吹田は、2階に入居しております。3階以上は、青少年活動サポートに関連する設備となっております。このほか、地下2階に図書館、1階に子育て相談の組織がございます。若者支援と図書館、子育て相談が一体となった施設であります。

なお、児童福祉や生活保護などの生活困窮と教育委員会につきましては、若者支援との親和性が高い分野となると思いますので、この表については、黒の太字で書かせていただいております。

では、次のページにお進みください。

開設までの経緯でございます。

ぷらっとる一む吹田につきましては、平成23年からこの施設の夢つながり未来館で運営されています。

運営主体は行政の直営となりまして、行政が会計年度任用職員となる相談員を任用して運営しております。

主な事業内容につきましては、貸室と交流活動支援、相談支援としております。

「であう場」「はじまる場」「ひろがる場」をキーワードに青少年の成長を支援する拠点、安心して子育てのできる環境づくりの拠点として運営されております。

では、次のページに移ります。

施設の特徴としましては、2階の相談機能、3階以上は青少年活動サポートに関連する貸室やロビーなどの設備が充実している点でございます。

運営面の特徴としましては、相談とロビーワークの連携は行っているものの、2階の相談スタッフと3階のスタッフとの人事交流が不足しているためか、今以上に連携が必要と感じているというお話でございました。

また、施設内の組織との連携としましては、図書館との複合化の有用性についてはご説明がありましたが、子育て相談との連携事例は聞かれることはございませんでした。

では、次のページにお進みください。

茨木市ユースプラザCENTERエントの調査報告となります。

エントにつきましては、2階に入居しております。各館の状況をご確認いただくとお分かりいただけたと思いますが、エントが入居する施設、この男女共生センターローズWAMにつきましては、交流サロンであったり、料理工房であったり、会議室などを備えているような施設になります。

では、次のページをお願いします。

開設までの経緯でございます。

エントは、コミュニティ施設のローズWAMの2階の一室の貸室を受けて活動拠点としております。他の事業者が施設管理者となっているため、貸室を利用するには一定の制約があるような状況でございます。

運営主体は、社会福祉法人ぽぽんがぽんです。

主な事業内容につきましては、学校の授業時間は不登校児童生徒などの居場所、放課後につきましては、元気な若者と困りを抱える若者が混在するような居場所となっております。

では、次のページです。

施設の特徴としましては、自前の貸室がないため、一緒に荷物を運ぶなど、ハード面の不便さを利用者の協力によってカバーしていて、そのことがスタッフと利用者の一体感を深めているというようなお話でした。

それと、一つの事務所で居場所の提供と相談支援と自立支援を行っているので、私的な相談があった場合、施設管理者に貸室を借りて行う必要があるというようなお話です。

次に、運営面の特徴としまして、重複するかもしれないのですが、設備上、占有する相談室がないので、交流サロンで困り事を把握しても相談対応が難しい場合があるというようなお話です。それと、徒歩圏内に青少年センターがあって、交流事業については、このセンターが担っているというようなお話でございました。

では、次のページをお願いします。

京都市伏見青少年活動センターの調査報告となります。

伏見青少年活動センターは、4階に入居しております。センターが入居する伏見区総合庁舎は、区役所機能が多くございまして、生活保護や子育て支援の組織があります。

では、次のページをお進みください。

開設までの経緯でございますが、京都市伏見青少年活動センターは、建て替え移転により、平成22年からこちらの総合庁舎で運営されております。移転の前は、同じく福祉事務所の庁舎に入居していたというお話でございました。

運営主体につきましては、公益財団法人京都市ユースサービス協会です。

主な事業内容でございますが、若者支援に関する事業のほかに、福祉部門から生活困窮児童生徒向け中学生等学習支援事業も受託しています。

それと、区生活保護担当課と気になる生徒の情報を共有して連携した見守りを行っているというような話です。

それから、センターのある地域ですが、外国人の割合が多いので、多文化共生事業のほかに、日本語支援事業も実施しているというようなお話でございました。

それと、京都市の特徴としましては、京都市は七つのセンターで役割分担を行っていて、総合相談機能を中央青少年活動センターに据え、そのほかの六つのセンターは活動支援を主たる事業としております。六つのセンターでは、それぞれのテーマを設定して特色ある

活動を行っているというようなお話でございました。

では、次のページです。

施設の特徴としましては、庁舎内にある多くの区役所機能があるという点です。また、行政庁舎内にもかかわらず、センターの設備として活動室、和室、調理室、武道室、体育室、ロビーなど、貸室機能が充実しているというところかと思えます。この点、庁舎の建設計画の頃から既に入居が決まっていたというようなお話があったので、そういう影響があったのだろうと考えております。

次に、運営面の特徴でございますが、これは全部お話ししますが、ユースワークの中で把握された児童虐待事案を庁舎内の子育て支援機関と共有することで、児童相談所の一時保護につながったという話もありました。

それと、児童相談所については、一時保護していた児童に対して家を離れて過ごせる居場所としてセンターをご案内しているというようなお話です。

そして、庁舎内に地域振興課の組織などございまして、合同で区民祭りなどのイベントを実施するほか、若者の意見聴取、ニーズの調査などといったものでセンターが協力しているというようなお話でございます。

飛びまして、23ページをお願いします。

神戸市青少年会館の調査報告となります。

神戸市青少年会館につきましては、5階に入居しておりまして、隣に若者サポートステーションがあります。施設は、3階以下が民間テナント、4階が教育委員会になります。

次ページをお願いします。

開設までの経緯でございますが、神戸市青少年会館は、令和3年からこの商業施設のハーパーセンター5階で運営されております。

運営主体は、特定非営利活動法人こうべユースネットです。

主な事業内容につきましては、貸室事業と若者交流事業を柱としております。貸室に関しましては、青少年活動の促進を目的とする団体であったり登録団体は無料で使用できるというようなお話でございました。

では、次のページをお願いします。

施設の特徴としましては、二つ目の文章になりますが、駅そばの立地で商業施設に入居しているため、若者が集まりやすい環境にある。潤沢な貸室を備えるなど、多くの青少年が利用できるような施設機能を有している点でございます。

運営面の特徴は、これも二つ目の文章ですが、パーティションを隔てた同じ事務室に別の事業者が若者サポートステーションを運営しておりまして、就労支援は容易に連携できるような状況になっておりました。

ただし、施設内の別フロアに教育委員会が入居していましたが、それらとの連携事例というようなお話は聞かれませんでした。

では、次のページをお願いします。

こちらでは、若者の交流促進を主とする2施設になります。説明につきましては、AKASHIユーススペースとさせていただきます。

次のページをご覧ください。

AKASHIユーススペースの調査報告となります。

AKASHIユーススペースは、5階に入居しております。1階から3階が民間テナント、4階が図書館、5階がユースと子育て支援センターが入居しています。そして、6階が区役所の窓口機能があるような施設になっています。

では、次のページです。

開設までの経緯です。

AKASHIユーススペースは、平成29年からこの商業・行政の複合施設のパピオス明石の5階で運営されています。5階には、AKASHIユーススペースのほか、子育て支援センター、ファミリーサポートセンター、一時保育ルーム、多目的ルームなど、貸室がいろいろございます。

運営主体は、神戸YMCAです。

主な事業内容につきましては、中学生が気軽に立ち寄れる第三の居場所として運営されています。若者の交流促進等の社会参加が主な事業となっておりまして、困り事を抱える若者相談はほとんどないような状況というお話でございました。

では、次のページです。

施設の特徴としましては、商業施設や図書館、その他の行政機能が集まっている点にあります。また、駅そばの立地で、マクドナルドなどが入居する商業施設であるとともに、同じフロアに幼児と親が遊べる屋内遊具などがございまして、すごく活気に満ちておりました。

また、AKASHIユーススペースを運営する事業者が神戸YMCAということからも、すごく明るいような雰囲気でした。

ただし、それゆえに、困り事を抱える若者が利用するにはちゅうちょするかもしれないなというような印象を私は持ちました。

運営面の特徴としましては、同一フロアに子育て支援課の市職員が常駐している点で、随時、情報交換されているというようなお話です。一方で、幼児と若者をつなぐ支援といった、子育て支援部門とユースの連携事例は聞かれませんでした。

では、最後に、33ページにお進みください。

参考となる他都市事例をお伝えさせていただきます。

まず、ロビーの提供事例となりますが、ロビーについては、一定程度の面積を確保した上で、自習・交流・軽食等の目的に沿ったゾーニングをしている好事例がございました。スタッフと利用者が関わりやすいように、事務所の配置であったり、カウンターを低くするなど工夫をしている事例がございました。

次のページです。

次もロビーの提供事例でございますが、若者同士の交流促進、社会参加促進、社会的自立を支援するため、最低限、若者が集うロビーと会議室、相談室の機能がなければ有効な活動は難しいというような印象としてあります。

それと、文化芸術といった側面を強く打ち出す運営につきましては、若者から高い評価を得られる面もございますが、困り事を抱える若者を捉えることが難しくなる場合もございます。福祉の視点を持ったスタッフの質も重要になるというようなことでございます。

では、次のページをお願いします。

最後に、行政サービスとの連携事例として、ユースワークの中で把握された児童虐待事案を庁舎内の子育て支援機関と共有することで、児童相談所の一時保護につなげていました。また、一時保護を解除した児童を若者支援施設が居場所として受け入れていたというような事例もございます。

それと、区役所機能と併設していることが区役所と若者支援施設相互に広報や意見聴取で協力し合っているほか、イベントなどを合同で開催しているというような事例がありました。

以上が他都市事例調査の調査結果報告となります。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 事務局からの調査報告は、いったん以上となります。

この後の進行は、引き続き部会長にお願いいたします。

○永浦部会長 それでは、ただいまの説明に対してご質問などがありましたらお願いいたします。

○金委員 まず、資料2ですが、この前の会議で居住形態についての話があったので、利用者アンケート調査の基本情報の中に追加されたと思うのですが、ここで性別を聞かなかった理由があるのかが気になるのですが、どうですか。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 実は、性別も聞いているのですが、こちらの概要版を作成するときに掲載を割愛させていただいておりましたので、口頭で補足させていただきます。

有効回答数が1,075件ございますけれども、このうち、男性が441人で41.0%、女性が590人で54.9%、それから、答えるのを差し控えますという方が26人、無回答が18人です。

○金委員 いわゆる女性が求めるサービスと男性が求めるサービスが違うと思ったので、ジェンダーについてお聞きしました。

それと、アンケート調査の細かなところですが、例えば、7ページでは、20歳から34歳と5歳ごとに刻んだのは分かりますし、上は50歳以上とあって全体的に合わせたということですが、下では0歳から19歳と書いてありまして、こういう書き方をすると、0歳が答えてくれたのかとなりますので、できれば、他が以上となっておりますから19歳以下と合わせるほうがいいかなと思いました。

それから、他のデータを見たときに、全体のケースが1,075人というお話があったのですが、9ページの右側を見るとnが837、11ページの左側はnが609とケースが違うのですが、これはどういうことかが気になりました。

○永浦部会長 今、ご指摘いただいたのは、全体では1,075人けれども、9ページの貸室の利用目的の右側の円グラフを見ると、nが837になっているというところですね。この違いはどういうところなのかをご回答いただきたいと思います。

○事務局（渡邊職員） 回答者は全体で1,075名ですが、9ページの場合は、1,075名のうち、利用したことがあるという64.1%の方に、さらに貸室の利用目的を聞いた形になっております。さらに利用したことがあるという方の複数回答の合計が837という数字になっております。

○金委員 つまり、利用したことがあるという人の中での複数回答になっているので、それを全部合わせた数が837ということですね。

○事務局（渡邊職員） おっしゃるとおりでございます。

○永浦部会長 資料を見ていると、例えば、11ページのY o u t h +（ユースプラス）以外に利用している類似施設の円グラフはnが689だったり、説明があるので概要版でも分かるのですが、一つの資料にまとめるときは、これは何人のうち何人から抽出したものですという文章があると齟齬がないかと思います。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） ご意見をありがとうございます。この後、ご指摘を踏まえて修正したいと思います。

○永浦部会長 他にございませんか。

○金委員 21ページに施設に求める機能とあるのですが、ここは現在ある機能に対して求めている機能なのか、今後さらに求めている機能なのかが気になります。つまり、現在やっている機能をより強化したいということが目的のアンケートなのか、これから求められる機能についてのお話なのか、ここはどのような目的で回答をもらったのですか。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） ご回答を申し上げます。

この問いの原文を申し上げますと、若者世代にとってY o u t h +（ユースプラス）に必要な機能はどのようなものだと思いますか、次の中から必要性が高いと思うもの上位三つを選択してくださいという聞き方をしております。そして、こちらから八つほど選択肢を提示して、最後にその他で自由記載もできるような形式で回答してもらっているものでございます。今後求められる機能についての問いになります。

○金委員 だとすると、今現在の機能の把握、プラス、その他に自由回答ということで、これからこの施設に求められている機能についての参考資料のデータですね。分かりました。

○永浦部会長 他にございませんか。

○大澤委員 どれを見ても若者支援施設なり若者支援事業が必要とされていることが非常



によく分かりました。さて、どうしようということが悩みどころかなと思います。

まず、基本的なことをお聞かせいただきたいと思います。

この後、議論するためにも若者世代の状況をきちんと把握することが必要かと思うのですが、資料2の施設利用者アンケートの7ページの居住形態は、年齢とクロス表にしてみないと、親、きょうだいと同居しているのはどの世代なのか、ひとり暮らししているのはどの世代なのかが分からないので、そのデータが必要かなと思います。同じように、職業の学生は高校生も含めているのですよね。これでは、データとしては使いづらいのですよね。

これは、高校生と大学生は分けて聞いていますか、学生とざっくり聞いていますか。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 学生とざっくり聞いております。

ただ、年齢は把握しております。

○大澤委員 それでは、そこから分けられますね。

年齢区分で職業を見たほうがいいと思いました。そうすると、若者の正確な状況がつかめるかなと思いますので、そこを一つお願いしたいと思います。

それから、資料5の他都市の事例ですけれども、いろいろな地域のセンターから話を聞いてこられたということで、非常に参考になると思いました。

札幌は、今、五つの施設を持っていますが、そういう形でかなり多くの施設を抱えているところと、単館しか持っていないところはどうなっているのかが気になったのですが、それは分かりますか。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） この中で複数持っているのは、京都、神戸の政令指定都市です。京都市は札幌市と非常に近いと思います。札幌の場合は、センターと活動センターの2種類ですが、京都の場合は、中央に相談機能を集約させつつ、サテライトにそれぞれテーマというのでしょうか、例えば、ここでご紹介した東山であれば文化に力を入れている、伏見であれば多文化共生に力を入れている、そういうようなやり方をされていました。

神戸は、最後にご紹介した青少年会館がセンター機能を有してしまっていて、その他に2種類あるようで、各区では活動がメインとなるような運営をされています。神戸の場合は、札幌と同じように、サテライトの機能分けはされていない様子でございました。

○永浦部会長 一つ目にご質問いただいたようなクロス集計は、アンケートでたくさんのことを細かく聞かれているので、時間はかかるのですが、今後何かを検討する際に、例えば、今は年齢と何かということで算出していただいています。それにプラス性別を入れて、よりミクロに見ていくことで検討できるかなと私も思いました。そのあたりは、もしかしら今後の審議の中で、こういうものは出ますかというものは必要かもしれないなど感じた次第です。よろしくお願いたします。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 貴重なご意見をありがとうございます。

私もご指摘のとおりと思っております。ただ、全てを細かくクロスするのは、作業ボリューム的になかなか難しいのですけれども、原データがございますので、特にこの項目について何と何のクロスが欲しい、ということをご事前にお知らせいただくと大変ありがたく存じます。

引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。

○永浦部会長 では、委員の皆様、全体の質問もそうですが、今あったように、アンケート結果でこのクロスをもう少し見たいということがございましたら、そちらもご意見をいただければと思います。

いかがでしょうか。

○岩崎委員 同じく資料2の21ページです。

ユースに求める機能ということで、僕が特に見たかったのは35歳から49歳と50歳以上の分布図になるのですけれども、こちらには施設を利用している保護者の方も含まれているのですか、それとも、ただ単に施設を使われている35歳から49歳、50歳以上なのでしょうか。

例えば、50歳以上の方が「不登校やひきこもりの方たちの相談支援」と回答していると思うのですけれども、これは保護者が答えているのか、利用してみて感じている方のご意見なのかがすごく気になったので、ご質問させていただきました。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 特に、利用者本人か保護者からかは、アンケートの中にチェックするところがないので、それは正確には分からないのですが、肌感覚としては利用者かなと思っております。

○オブザーバー（松田） 実際に私どものスタッフが施設を利用されている方に直接聞いております。もしかしたら、保護者がたまたまお迎えに来られて、そのときに利用されているから聞いたというものもほんの数件混じっているかもしれませんが、基本的には、貸し部屋として使われている方で、相談に来られている方に持って帰って親御さんに回答してもらってというものはありません。

ですから、35歳から49歳ですと、相談を受けに来ている本人も入っているし、50歳以上となると、ほぼほぼ貸室利用に来られている一般の方から見て、例えば、私たちは貸室しか使っていないけれども、不登校やひきこもりの人たちの相談支援もこういう場所には必要ではないかしらということでチェックされているという意味合いを含めてのグラフになるかと思えます。

○永浦部会長 他にいかがでしょうか。

○金委員 アンケート結果の14ページのロビーの滞在時間のデータを見ると、「1時間以内」という回答があります。この言い方ですと、例えば、「10分程度」も「1時間以内」になるのですよね。ですから、「10分程度」を強調したい場合は、以内という言い方はよくないかなと思いました。

それから、先ほど出ていた話ですが、資料3では当事者という言葉を使っているのです

が、資料2では利用者という言葉を使っていますよね。これは違いがあるのでしょうか。  
○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） まず、最初のご指摘は、おっしゃるとおり、こういうものは厳密に選択肢を設定しないと正確な回答が得られないので、10分から1時間という設定が適当だったかと思っております。

ただ、これはチェック式の単一回答なので、恐らく、1時間にチェックしてくれた方は、10分以内というものも見た上で10分以上だなということで選んでくれたのではないかと推測していますけれども、今後は気をつけていきたいと思います。

それから、言葉の使い方の利用者と当事者ですが、そこはあまり意識していなかったのですが、資料2のアンケートは、今現在ここを使っている方に対してアンケートをするという意味合いで、利用者という言い方を使っておりました。これに対して、資料3は、ヒアリングを行うときに、支援をしている方と、実際にここに来ている方、あるいは、まだ来たことはないけれども、支援を受ける側の若者という意味合いで、支援者と若者当事者の両方からお話を伺いましたということを表示したかったので、当事者という言葉を使いました。

○永浦部会長 他はいかがでしょうか。

○荒木委員 遅れての参加、大変失礼しました。

当事者と利用者というところで、もしかしたら関係するかもしれないのですが、資料2の18ページ、19ページが相談支援・イベントの参加者のアンケート結果だと思うのですが、交流イベントに参加した人とボランティア活動として参加した人は参加意思でも少し違うと思っています。交流事業、ボランティア活動を分けられるのかといたら、ボランティアとして参加した人が気持ちにどんな変化があったか、イベントに参加したらこういう変化があったと分けられるのかが一つ知りたいと思ったところです。

ただ、自分自身、大学生にボランティア活動に参加してごらんと促して、イベントに参加するようにサポートしている側としては、きっかけが欲しかったというところで、あまり変わらない部分もあるので、そういう意味も含めて分けられるのかなと思いました。

もう一つ、資料5の他都市の事例の34ページの京都市の活動センターの方のお話から受けたコメントの「文化・芸術といった側面を強く打ち出す運営は、若者から高く評価を得られる面もあるが、困りことを抱える若者をとらえることが難しくなる場合もあり、福祉の視点を持ったスタッフの質も重要」というところが、今後、札幌市がこの組織をどういうふうに動かしていくかというところすごく重要となるのではないかと私は思っているのですが、ここでいう文化芸術は何を指すのかが気になっています。サブカルチャー的なものも芸術と含むのか、文化と芸術は分けて考えているのか、そのあたりのところは伺いたいと思いました。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） まず、1点目の相談支援と、イベント・交流については、申し訳ございませんが、このアンケートでは、現在の活動の内容を細かく分析するというよりは、貸室、ロビー、ソフト的なものの三つに絞って、今後の

必要性を探るといような趣旨で行っております。ちょっと乱暴ではあったのですが、相談支援やイベントを細かく分析できるような聞き方をしておりませんので、ご質問については分析が難しいということでご理解ください。

それから、2点目の文化芸術は、私たちの説明ぶりが大雑把で伝わりづらかったのだと思うので、補足をさせていただきます。

恐らく、京都という地域性、昔から、ものづくりを大事にされてきた背景があって、実際に施設に行ってみると、染め物を行うための設備や、陶芸用のすごく立派な窯があって、若者センターというよりは伝統文化、伝統工芸品を継承していく拠点のようなところでした。そこを強く打ち出していくと、そうした活動をやりたい人たちが集まって来るので、例えば、ここ（札幌市若者支援総合センター）であれば、様々な方に来ていただいて、その中に、もしも困りを抱えている方がいらっしゃったら関わっていくというようなことを、少なくとも、これまでの札幌では大事にしてきたと思うのですが、今言った一から糸をつむぐとか、染めるという、そういうところに特化し過ぎると、その分野をやりたい、スペシャリストのような方が来るようになってしまいますというふうにご理解いただきたいと思います。

○荒木委員 勝手に思い込みでイメージしていたのですが、私がイメージしていた文化芸術は、音楽活動やロビーでカードゲームをするということなので、いいと思うのだけだと思っていたのです。

よく分かりました。ありがとうございます。

○永浦部会長 他にございませんか。

○オブザーバー（松田） 私も関西出身であることと、同業者として京都の方とは何度も意見交換をしているので、補足します。

札幌と違って京都は、この地域は外国籍の人が多く住んでいる、ここは昔からものづくりをやっているという地域性がすごく強いところで、京都市ユースサービス協会が運営していくときに、それぞれ地域色を出そうということで、国際文化を全面に出したセンター、大学生が多いからスポーツに力を入れたセンターと建物ごとに色を持っていて、そのベーシックなところのカードゲームをやったり、ロビーでおしゃべりしたりというものがベースにありつつ、特色として持っています。たまたまおっしゃられたここは、ものづくりを中心に据えていて、それに関心のある地域の方は多いです、そこからの評価は高いけれども、いわゆるそういった営みを通じて小さなSOSや若者のニーズをキャッチしていくところからはちょっと距離ができてしまうという課題があるということかと思えます。

○永浦部会長 補足も含めて、ありがとうございました。

他にございませんか。

○金委員 先ほど引地課長から必要なアンケートのクロス集計がありましたらお話をしてくださいとありましたので、申し上げます。

ユースに求める機能というところで、先ほど言ったようにジェンダーの差があるのかどうかということでは性別と、職業によってもニーズが違ってくるかもしれないので職業、そして、年齢別に求める機能も違っていると想定されるので年齢、そうすると、性別、職業、年齢によるクロス表があったら、より良い分析結果になると思います。

○永浦部会長 私からもクロスのところ、先ほど荒木委員から質問があったとおり、どれぐらいのニーズの方のユーザーにアクセスするのか、かつ、財政的なところを考えると、全ての機能をつくるのは難しいけれども、私はロビーが非常にポイントになるのかなと思いました。

そこで、14ページの滞在時間によって、15ページのスタッフの方の関わりがどれぐらい、例えば、何分の方はどれぐらいなのかということと、この滞在時間が長い人と短い人で、21ページの施設に求める機能が異なるのかが分かると、いわゆるライトユーザー、ヘビーユーザーという言葉がヒアリングの中でも出てきましたけれども、それによる違いで、施設の機能や規模を厳選していく上での一つの指標になるかなと思いました。もし可能であれば、その提示をお願いしたく存じます。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 次回の前までにできると思いますので、ご提示させていただきたいと思います。

○永浦部会長 よろしくお願ひいたします。

他にご質問があれば、お願ひいたします。

○荒木委員 今、私の大学の学生がさっぽろ青少年女性活動協会のユースワーカーの皆さんにご協力いただきながら、大学生がユースワーカーになっていこうという取組を少しずつ始めているのですが、体験に行った学生の報告会をしていたときに、それに参加をしなかったけれども、たまたま見ていた学生がそこを知っていると言ったのです。よくよく聞いてみたら、昔、親御さんの関係で家でご飯が食べられなかったときに、お姉さんに連れられて豊平のセンターに行ったことがある、そこでご飯を食べさせてもらったのがいい思い出だと言っていたのです。その子は、やはり中学生の頃は何度も行っていました。

もしロビーの滞在時間というところで何か割り出すことができたなら、そういう福祉的な支援につながる可能性も出てくるのではないかと考えると、ロビーの滞在時間は確かに重要かもしれないなと思いましたので、補足させていただきます。

○永浦部会長 では、他になければ、次の議題に移りたいと思いますが、まだ何も発言されていない工藤委員、ぜひお願ひいたします。

○工藤委員 これは事務局というよりも、松田オブザーバーに聞く話かもしれないのですが、今の資料2の15ページのロビーのところ、スタッフとの関わりという設定がされているかと思うのですが、相談支援の場合は、当然、相談支援のスタッフと関わりがあるでしょうし、イベントでもスタッフとの関わりがあるかと思うのですが、通常の施設の利用の方でスタッフとの関わりはどんな感じになっているのでしょうか。ないのか、何かあるのか、もし分かったら教えていただきたいと思って質問してみました。お願ひします。

○オブザーバー（松田） 施設の利用を大きく分けると三つあって、一つは部屋を借りにくる方で、その方々は、受付で部屋を予約している誰々ですと一声、二声かけておしまいになります。その場合、スタッフとしては、その後、活動を終えてロビーで休んでいるときに、利用時間10分程度の層で、かつ、若いメンバーであれば、そこから少し声をかけて関係づくりをしています。

二つ目は、自習しに来たとか、何をしに来たわけではないけれども、ロビーにいるような1時間以上滞在組であれば、そこは間違いなく声をかけています。熱心に自習をしているときはそっと通り過ぎるときもありますし、勉強しているけれども、友達同士で少しおしゃべりをメインで来ているときはそこに入っていったり、1人で何度も自習しに来ている人は、いつも1人なので勉強の合間に声をかけるなど、そこは必ず何かしらの関わりが生まれます。また、交流イベントに誘ってみるといことが行われると思います。

三つ目は、相談支援です。相談の予約に来たとか、どこかからご紹介されて相談に来た方です。相談に来た方の中にも、相談の帰りにロビーに寄って休んだり、相談の後のコミュニケーションプログラムの一つとして交流行事に誘われたり、相談に来ているけれども、この方は仲間づくりに課題がある、あるいは、ニーズがあるというときに、相談員がロビーにいるユースワーカーを呼んで、この方をロビー利用につなげてくださると膨らませる形で、相談から始まってロビーにつながります。もちろん、逆に、ロビーから始まって相談につながることもあります。

そのあたりの三つの利用目的の入り口がそれぞれありながら、そこから関係をつなげていくという営みをしているというフローというか、イメージです。

○永浦部会長 では、他にあれば、後日、メール等でやり取りしていただけたらと思います。

では、次の議題に移ります。

議題の（2）基礎調査で把握された課題等を踏まえた討議・意見聴取事項についてに入ります。

議題の提案趣旨について、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 事務局から提案の趣旨についてご説明申し上げます。

お手元に資料6をご用意いただきたいと思います。

この部会には、親会議である子ども・子育て会議から、基礎調査の結果に基づいて、今後の若者支援施設に求められる役割と、そのために必要となる機能等を審議し、提言としてまとめることが付託をされているところでございます。

これらにつきまして、時間に限りがある中で、効率的に討議や意見聴取を行っていくために、最初にある程度論点を絞った上で進めていってはいかがか、ご提案したいと思いません。

こちらの資料6が事務局の案としてご用意をさせていただいたものになりますけれども、

こちらに記載の1から5までは、先ほど資料4でニーズ面と供給面で五つ課題がありますとご報告したのについて、それぞれどのような方策や対応が考えられるか、ご討議、ご意見をいただきたいという内容になっております。

これに、6番目、その他としておりますけれども、委員の皆様からも、こういうことも付け加えて議論したほうがよいというものがありましたら出していただきまして、それらも加えて、事前にある程度議論事項を設定した上で、次回以降の部会の審議を進めていってはいかがかというご提案になります。

説明は以上でございます。

○永浦部会長 それでは、事前に討議事項を設定した上で、検討、審議を進めていくという進め方について、ご質問やご意見がありましたらお願いいたします。

（「なし」と発言する者あり）

○永浦部会長 特に反対のご意見がなければ、次回以降は、事前に討議事項を設定した上で進めていくこととしたいと思います。

皆さん、よろしいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○永浦部会長 ありがとうございます。

では、そのように進めていくと決定いたします。

続きまして、事務局から提案がありました資料6の1から5の他にも、こういうことも議論しておいたほうがいいのかという事柄やテーマがありましたら、今この場でご発言をお願いしたく存じます。

いかがでしょうか。

○永浦部会長 今この場ではなかなかすぐに思いつかないかもしれないなと思います。

事務局にお尋ねしますが、後日、各委員から事務局にこういうものがあればということ連絡する形でもよろしいでしょうか。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 今ご説明申し上げたばかりで、すぐ出してくださいと言われても、皆さんもお困りになると思います。もしあれば、できれば今年中に事務局にお寄せいただきまして、その結果を年明けに事務局から皆さんにメールで連絡するというにしたいと思います。

よろしくをお願いいたします。

○永浦部会長 そういう形でよろしくをお願いいたします。

では、次の議題に移らせていただきます。

議題（3）今後の進め方について、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） それでは、続きまして、資料7をお手元にご用意ください。

まず、次回第4回の日程は、こちらの資料では1月中・下旬としておりますけれども、一昨日メールでお送りさせていただきましたとおり、1月21日火曜日が皆さんのご予約

が合うようでございますので、1月21日午前中とさせていただきたいと思っております。

開始時間については、この後、事務局で調整をして、後日、ご連絡をいたします。

この日は、先ほどの資料6の1から5と、この後、皆様から追加でお出しいただく項目について、集中的にご意見をいただきたいと思っております。

その後、第5回は、第4回でいただいた意見を事務局で整理いたしまして皆さんにフィードバックし、論点を整理の上、提言の骨格を固めていく作業を行いたいと思っております。

日程は、2月下旬から3月上旬頃を想定しております。

その後、第5回の議論を基に事務局で提言書の素案を調整いたしまして、新年度に入ってしまうと思いますが、大体、ゴールデンウィーク明け頃に調整した素案をもんでいただいて、7月ぐらいまでにはまとめた、現段階ではこのような進め方を考えているところでございます。

説明は以上でございます。

○永浦部会長 それでは、ただいまの説明について、ご質問がありましたらお願いいたします。

（「なし」と発言する者あり）

○永浦部会長 なければ、今後、原案に沿って進めていくこととしたいと思っておりますが、皆さん、よろしいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○永浦部会長 では、今後、原案に沿って進めていくこととしたいと思っております。

議題（3）は終了といたします。

以上をもちまして、本日予定していた議事は全て終了しましたが、何かご発言があればお受けしたいと思います。

ご発言のある方はいらっしゃいませんか。

（「なし」と発言する者あり）

○永浦部会長 特にないようですので、この後の進行は事務局にお返しいたします。

### 3. 閉 会

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 部会長、ありがとうございました。

それでは、事務連絡が2点ございます。

1点は、先ほどの追加の討議事項がある場合については、年内に事務局までメールでご連絡をいただきたいと思っております。

もう一点は、繰り返しになりますが、次回は1月21日午前中を考えておりますので、ご予約に入れておいていただければと思っております。

それでは、以上をもちまして、第3回部会を終了いたします。

本日も長時間にわたってご審議いただき、誠にありがとうございました。



以 上